

56豪雪

<56豪雪>

昭和56年2月26日は、前日から吹雪いていました。一晩で腰まで雪が積もり、交通が麻痺してしまいました。道路は走った車で踏み固められ、アイスバーンになっていました。時折吹く強風にあおられ、走っている車が、風に押されて田んぼへ落ちるといふ光景まで見られました。

この日は、朝、学校を出発したスクールバスが、児童を乗せて学校に着いたのはお昼近くになってからでした。先生方の中には自家用車で通勤ができず自宅から歩いて学校まで来る人もいました。そのため、遠方の先生の中には、昼過ぎに学校へ到着した人もいました。



学校へは、給食の材料も届かなかったため、在庫のある材料を工夫してスープが用意されました。たった一杯の温かいスープでしたが、最高のごちそうでした。



下校時は、各地区から地区委員の方たちが、児童を迎えに来てくれました。この年は、旭丘小学校と分離する前の年でしたので、最も遠方の倉部町からも十数人の大人の方が長いロープを持って迎えに来てくれました。

この年は、正月から雪が大変多かったので、後に「56豪雪」と呼ばれました。

広報「北陽」第40号（平成元年3月23日発行）の中にその様子を書いた文がありました。40号を記念して、かつて北陽小学校に勤務していた先生方に思い出を書いてもらった中のひとつです。加藤先生は、三年生の担任でした。

吹雪

加藤 立太郎

あれは、もう十年近い昔、日本中が冷蔵庫のように冷えこんだ日だった。

朝の三番のスクールバスが、九時になっても十時になってももどって来ない。連絡もとれない。緊急職員会議の結果、当日の授業は中止となり、既に登校している子供達を迎えに来るようにと、各町々へ通報された。やがて、屈強な男達が町毎に長いロープを持ってやって来た。電車ごっこのように、ロープの中に子供を入れてつかまらせ、父親達は回りを囲んで進むのだ。子供達は、それぞれ親達に守られて、吹雪の中へ消えていったが、最後に、十一時も過ぎたころ、やっと鉄工団地からお迎えが来た。見るとお母さんばかり四、五人である。

よし、自分も行ってやろうと一緒に出発した。視界は十メートル、前も後も真白、真白な中をわずかに消え残った足跡をたよりに、あさひ荘苑目指して進んだ。先頭の運転手の役目は五年生の金田久美子である。吹きさらしの中、これでもか、これでもかと、吹雪が子供達を吹き飛ばそうとする。ロープを風上へとしゃくると、自分の足が逆に風下へすべると、「西風運ぶ雪にも負けず」だ。金田頑張れ、小さい子泣くな。

悪戦苦闘しようやく鉄工団地に着いて顔を見合わせたら、眉もまつ毛も真白で、まるで南極探検隊のようになっていた。

(五十〜五十五年度)